

「災害ボランティア・トレーニング」の実施にあたって

● 災害支援にボランティアが必要な理由

日本では、「ボランティア元年」と呼ばれる阪神淡路大震災以降、大規模な災害に被災地外から応援が駆けつけるという、独自の災害ボランティア文化が広がり始めました。その後、ボランティアが被災地で災害支援の一端を担う場面が増え、その動きは東日本大震災で再び大きな注目を集めることになりました。

医療ボランティアや重機を使った瓦礫撤去など、専門の資格やスキルを必要とするものもありますが、一般的に被災地でボランティアが行うのは、避難所での生活サポート、炊き出し、清掃などの活動が主です。そのほか、足湯マッサージをしながら被災者の話に耳を傾ける心のケアの活動などもあります。災害の種類や規模によってニーズは異なりますが、遠くから応援に来てくれたボランティアの姿は、それだけでも被災された方々を勇気づけるきっかけになります。ボランティアが献身的に清掃する姿に刺激され、あきらめかけていた店舗の再開を決めた、などのエピソードもたくさん報告されています。

また、被災地には、自衛隊や地元行政など、法律や平等性のルールで動くことが決まっている組織には担うことのできない災害支援の活動分野があります。例えば、道路や公共施設などの公の場所以外、つまり個人宅や個人商店の屋内清掃は、その代表的なひとつです。NGO/NPOなどの民間の支援団体やボランティアが担わなければ、被災者自らが行う、もしくは被災者がお金を出して地元業者へ依頼しなければいけません。東日本大震災でボランティアの多くが、家屋の泥だしや家財道具の運び出しなどに参加したのは、それがボランティアにしかできない分野だったことも大きく関係しています。



石巻市で清掃作業を行うボランティア

そのほか、東日本大震災では、避難所と違って人数把握の難しい在宅避難者への支援物資配布や炊き出し、一緒に地域のお祭りを盛り上げる、子どもたちに勉強を教えるといった活動も多く見られました。これらも、もちろん災害対策本部などからの指示によるものではなく、現場の状況に合わせて民間の支援団体やボランティアが、被災された方々との関係の中で、独自に判断して行った活動です。こういった枠組みで日本の災害支援が動いている以上、ボランティアのキャパシティビルディング(能力強化・向上)がこれからの災害支援の大きな鍵を握っているとも言えるでしょう。

● 災害ボランティアの心構え

「ボランティア」とは、自発的・自主的という意味ですから、誰かに命令されたり、賃金をもらって働く労働とは違います。「やりたい人がやりたいようにやっていたい」ともとれますが、それぞれがバラバラに動いているだけでは、効果的な支援につながらないばかりか、かえって被災地への負担を増やすことにもなります。阪神淡路大震災では、ボランティアが熱意だけで着の身着のまま現場に入り、被災者用の炊き出しの列に並んでしまったり、狭い避難所での生活スペースを奪ってしまったといったケースが多発しました。

その反省を踏まえ、その後「自己完結・自己責任型」で、「災害ボランティアセンターや支援団体に登録して活動する」ボランティアのスタイルが一般的になります。もちろんボランティアといっても大勢の人が移動・生活をするわけですから、トイレや宿泊場など最低限の設備は必要です。しかし、水や食料、場合によってはテントや作業に使う道具も持参するなど、なるべく被災地への負担を減らすことが、ボランティアに参加する側のマナーとされています。また、最終的な復興の主体となるのは被災された地元の方々で、ボランティアはそのお手伝いをに徹する「被災者優先」の言動が望ましいとされています。

被災地外からのボランティアの呼びかけが始まるのは、緊急人命救助が最優先とされる72時間を越え、ボランティアの受け入れ準備が始まってからというタイミングが一般的です。また、災害の規模や受け入れ体制によっては、被災地外からのボランティアの募集は行わず、地元在住のボランティアを中心に作業を進めることもあります。外から応援に行くボランティアは、「いてもたってもいられない」とやみくもに現場に向かうのではなく、事前に調べられる情報を確認し、「素早く動く」「待ってから動く」のどちらにも臨機応変に対応することで、被災地への負担を大きく軽減することにつながります。

● 不足していた「作業現場のリーダー」の存在

広域かつ大規模な被害に見舞われた東日本大震災は、圧倒的に外からの応援を必要とする災害でした。しかし、発災からしばらくは、「ボランティアは時期尚早」と言われ、被災地での受け入れがあまり進みませんでした。というのも、ボランティアの受け入れの中心を担う社会福祉協議会自体も多くが被災し、ボランティアが向かうべき災害ボランティアセンターの立ち上げが遅れたためです。

一方で、民間の支援団体が遠隔地でボランティア希望者をまとめ、団体自己完結型で活動する「ボランティアバス」が多く企画されることとなります。この方法は一定の効果を見せ、徐々に社会福祉協議会からも個人ボランティアの受け入れを担う余裕が生まれ、また企業CSRの一環で社員ボランティアのグループ派遣が動き出すなど、東北沿岸部という地理的なハンディを抱えながらも、多くの人ボランティアに参加する流れにつながりました。



災害ボランティアセンターで登録を待つボランティア
(大分県竹田市、2012年7月)

しかし、これだけでボランティアの受け入れが完全に担えたわけではありません。課題となったのは、人材の不足、特に毎日入れ替わる個人単位のボランティアを束ねる作業現場のボランティアリーダーの不足でした。災害支援を専門とするベテランやコーディネーターがいたとしても、彼らは膨大な事務作業や打合せに追われていますし、何より一人の人間の目の届く範囲は限られています。そこで必要となるのが、変化の激しい被災地の状況や支援の進み具合を中長期で把握し、毎日ボランティアと一緒に「現場」に出るボランティア・リーダーの存在です。1人のリーダーが20人の現場を預かるとするなら、10人のリーダーがいれば200人のボランティアで10の現場を預かれるということになります。

これまでボランティアは、「いつ何人が集まって、いつ帰るのか分からない」とされ、組織化は難しいと言われてきました。しかし、全体をまとめるコーディネーターと作業現場のリーダーの役割分担ができれば、ボランティアと被災者とコミュニケーションの橋渡し、作業の効率や安全・危機管理などに責任が生まれ、飛躍的に支援のスピードが上がります。今年7月の九州北部豪雨災害において、PBVのボランティアリーダーたちと大分県竹田市の社会福祉協議会とが協力して行った緊急支援では、その可能性を十分に感じる事ができました。

● ボランティアに参加する側のとまどい

コーディネーター、リーダーによる受け入れ体制が進んだとしても、支援を実施する上で最も大切なのは被災地に必要数のボランティアが集まることです。土日に偏りやすいなどの人数のアンバランスはありますが、阪神淡路大震災以降の災害でも、多くのボランティアが応援に駆けつけている実績が残っています。海外では、これほど多くの一般市民が被災地で活動している例はごくまれで、その意味では、日本に共助(助け合い)の文化が根付いていると言えるのかもしれませんが。

PBVでは、東日本大震災の被災地ボランティアの人数が減少していた2012年2月、Hack for Japanと協力し、「災害ボランティアに関する意識アンケート」を行いました。この結果から、東北での継続した支援活動への課題や、災害ボランティアに参加する際にどういった問題点があるかを知るヒントを見つけることができました。

〈表1〉 災害ボランティアに参加するにあたり
困ったこと・問題点がありましたか？ ※複数回答可

初めての参加で不安	192人	(14.36%)
現地情報、活動情報の不足、混乱	172人	(12.86%)
被災地までの交通手段の確保方法	169人	(12.64%)
お金の問題	164人	(12.27%)
どこに行けばよいかわからなかった	139人	(10.40%)
安全面の不安	119人	(8.90%)
体力の不安	116人	(8.68%)
特になし	87人	(6.51%)
放射能への不安	73人	(5.46%)
周囲の理解を得るのが大変だった	47人	(3.52%)
時間の確保	11人	(0.82%)
その他	48人	(3.59%)

〈表2〉 今後、もっと災害ボランティア参加者を増やす
には何が必要だと思いますか？ ※複数回答可

簡単な準備で参加できる仕組み	302人	(15.59%)
災害ボランティア情報の充実	300人	(15.49%)
週末のみでも参加できるプログラム	295人	(15.23%)
ボランティア休暇	288人	(14.87%)
被災地までの交通費の支給	236人	(12.18%)
被災地に行かなくても貢献できる作業内容	225人	(11.62%)
ボランティア同士の交流	145人	(7.49%)
地元住民からの感謝の声	57人	(2.94%)
その他	89人	(4.59%)

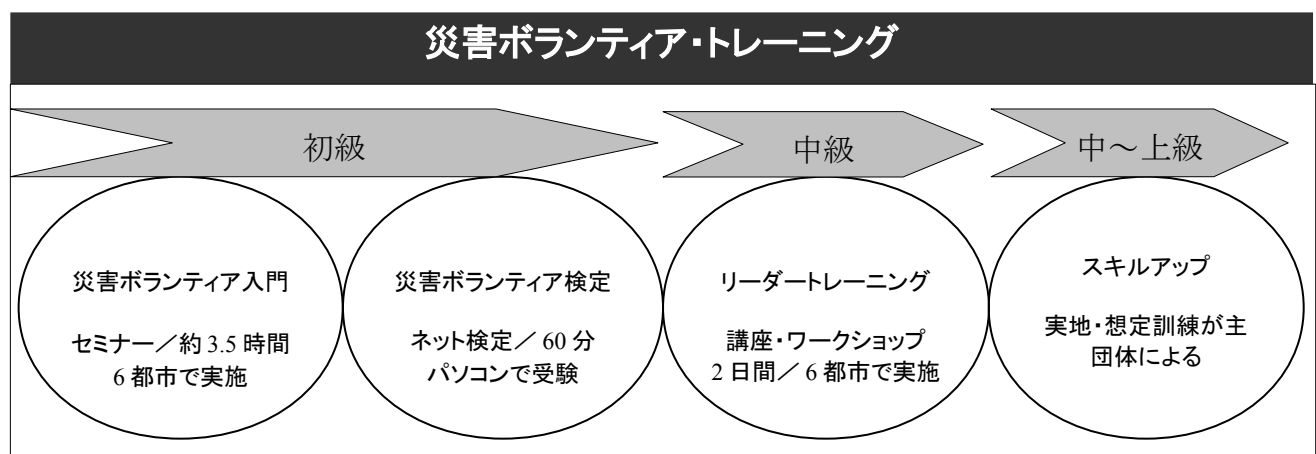
（実施：ピースポート災害ボランティアセンター／Hack For Japan）

時間や交通手段の確保、資金面などの物理的な課題もありますが、〈表1〉の「ボランティアに参加するにあたり困ったこと・問題点がありましたか？」という質問に対し、約半数が情報不足やはじめての参加に対する不安を口にしています。つまり、ボランティアに対する情報不足や不安を取り除くだけでも、参加する人が大幅に増える可能性があるということです。また、最低限の災害に対する知識や心構えを知ることで、参加するボランティアの側に被災地への想像力が生まれ、より効率的な支援につながるとともに、余計なプレッシャーといった精神的な負担を和らげることもつながります。

また、昨年9月の紀伊半島台風・和歌山県新宮市熊野川町でのPBVが行った緊急支援では、50年ぶりとも言われる被害にも関わらず、現地で活動するボランティアの人数が圧倒的に不足していました。交通の便の悪さなどのハンディもありましたが、現地情報やボランティアに関する報道も少なく、「経験のない自分がボランティアに行っても邪魔になるのでは？」といった不安が、二の足を踏ませることになったと予想できます。こういった支援のバラつきを解消するにも、平時から災害ボランティアに対する基本的な理解を広げることが大切だと言えます。

● 災害ボランティア・トレーニング

PBVでは、これらの可能性と課題に向き合い、今後、全国的に災害ボランティアの普及を進めるため、以下4つのステップでの「災害ボランティア・トレーニング」を実施していきます。



【 災害ボランティア入門 】

個人で行う災害への備えや災害支援に関する一般知識、被災地で起こりうるケガや病気のリスク予防、出発前から活動後までの心構えなど、主にこれまで災害ボランティアに参加したことがない人を対象としたセミナーです。実施地域は全国6都市で、参加は無料。PBVのスタッフや各地のボランティアリーダーが担当します。

レベル:初級	形式:セミナー(要予約)	実施時間:約3.5時間	受講料:無料
--------	--------------	-------------	--------

内容: 災害支援の一般知識、被災者への配慮、ボランティアとしての心構え、被災地で起こりうるケガや病気の予防・自己安全管理、個人でできる災害への備え など

初回日程:	東京	2012/09/23(日) 13:00-16:30	PBV 東京事務局
	神奈川	2012/09/22(土) 13:00-16:30	ピースボートセンターよこはま
	愛知	2012/09/30(日) 13:00-16:30	ピースボートセンターなごや
	大阪	2012/09/29(土) 13:00-16:30	ピースボートセンターおおさか
	福岡	2012/09/28(金) 13:00-16:30	ピースボートセンターふくおか
	宮城	調整中	

【 災害ボランティア検定 】

安全に、かつ被災地に負担をかけることなく効果的な支援を行うために、ボランティアが考慮すべきことは？災害ボランティアに参加するにあたっての基本的な知識や心構えを身につけるための検定試験です。インターネット検定なので、上記セミナーに参加できない方も、パソコンで気軽に受けられます。(詳細は別紙参照)

レベル:初級	形式:インターネット検定	回答時間:60分	受講料:3,150円(税込)
--------	--------------	----------	----------------

内容: 災害支援の一般知識や、「発災直後」「出発前」「活動中」「帰宅後」など、ボランティアとして認識すべき行動について、時間軸に沿った計60問(3択回答形式)を出題。

受験方法: ホームページから申込み後、ネット接続されたパソコン環境でいつでも受験可能です。

合否: 80%以上の正解をもって合格。試験終了後、すぐに採点結果と合否の確認ができます。

再試験: 不合格の場合は、合計3回まで追加料金なしで受験が可能です。

【 リーダートレーニング 】

「災害ボランティア検定」の合格者を対象とした2日間のプログラムです。防災・減災に関する知識、被災者とボランティアに対する理解、活動現場の安全管理やリーダーシップなど、状況の変化に対応しつつグループをまとめる判断力を養います。トレーニングは、現場での活動経験を持つトレーナーが担当します。

レベル:中級	形式:講座・ワークショップ	実施期間:2日間	受講料:5,000円(予定)
--------	---------------	----------	----------------

※昨年11月より実施してきた「リーダートレーニング」は、より広域でのボランティアリーダーを輩出するため、2日間で受講可能なカリキュラムに再編し、6都市での開催していくことになりました。9月中には新カリキュラムの発表、10月後半から順次開催を予定しています。

【 スキルアップ 】

野外での救急救命、ボランティア・コーディネーターとしての心得など、分野別に個人スキルを磨くための講習やコースを紹介しています。他の協力団体が実施する講習など実施・受講スタイルはそれぞれ違いますが、より実践を想定したプログラムがほとんどです。

レベル:中級～上級	形式:分野別、想定訓練など	実施期間:各団体HP参照	受講料:各団体HP参照
-----------	---------------	--------------	-------------

<スキルアップ 推奨コース／協力団体 一例 >

Wilderness Medical Associates Japan



もしも、全てが機能を失った被災地に居合わせたとしたら・・・、山岳での事故現場に遭遇したら、我々には何ができるでしょうか？

本コースでは、野外／災害現場での適切な救助活動を目指し「システム化した評価方法」を学び、また「実践的な野外シミュレーション」を繰り返すことで、“手に技術として残る救急法”を習得します。
<http://www.wildmed.jp/>

日本ボランティアコーディネーター協会



ボランティアしたい人と受け入れたいニーズをつなぐという狭い意味だけの機能ではなく、一人ひとりが市民社会づくりに参加し、その力と可能性を發揮できるように支えるチカラ“ボランティアコーディネーションカ”。

災害時においてもこの“コーディネーション”の機能が不可欠です。このチカラを身につけ、幅広い市民活動の場面において發揮していただくために、ボランティアやボランティアコーディネーションについて体系的に学びます。

<http://www.jvca2001.org>

東日本大震災女性支援ネットワーク



Rise Together
東日本大震災
女性支援ネットワーク

災害時、被災者は、性別、性自認、年齢、障害の有無や種類、家族形態などにより直面する困難に違いが生じるため、効果的に支援を行うには工夫が必要です。被災者中心の支援を行うために必要な、ジェンダー・多様性の視点と支援方法について、国際的な災害救援現場で使われている支援基準も交えて学びます。
<http://risetogetherjp.org/>

ピースボート災害ボランティアセンター



被災地で活動するボランティア・リーダーが、被災者と接する上で、ボランティアをまとめる上で起こり得る事例を取り上げ、ケーススタディーを行います。

取り上げるケースは東日本大震災で、実際にボランティアリーダーたちが現場で向き合った事例。チームディスカッションや発表を通じて、現場のリーダーとしての判断力や想像力を養います。

<http://pbv.or.jp/>